

エレミヤ書21-23章「王と預言者」

1A 敵対される主 21

1B 悔い改めなしの救い 1-10

2B 誤った保障 11-14

2A 断たれるダビデの王座 22-23:8

1B 正しい裁き 1-9

2B ヨシヤ以後の王 10-30

1C 二度と帰らぬ王 10-12

2C 不義による自分の家 13-19

3C 投げ捨てられる子孫 20-30

3B 正しい若枝 1-8

3A 偽預言者 23

1B 汚れた行ない 9-15

2B 心の幻 16-24

3B 夢と御言葉 25-32

4B 主による重荷 33-40

本文

21章を開いてください。21章からエレミヤの預言はもっと具体的になります。2章から始まるエレミヤの預言は主に八つありましたが、すべて一般的なものでした。ユダが犯している罪に対して、神の怒りが下ることについての内容でした。その結果、最後の20章を読むと、主の宮の監督者であるパシュフルがエレミヤに鞭打ち、足かせにはめ、エルサレムの町の中で彼をさらし者にしたのです。最後にエレミヤが落ち込んで、自分の生まれたことさえ呪っていた言葉で終わりました。

けれども21章からは、具体的な王の名前が出てきます。ヨシヤの死後、南ユダを治める王たちの名が出てきます。私たちが列王記第二、歴代誌第二の最後のところで読むことのできる最後の王です。ヨシヤの死後、彼の子エホアハズが王になりました。彼は三ヶ月で、エジプトのパロに捕え移されました。次にエホヤキムが王になりました。11年間の統治です。彼は途中でバビロンに反逆し、その結果、ネブカデネザルは略奪隊をユダに送りました。そしてその次に、エホヤキムの子エホヤキンが王となりますが、彼の治世も短く三ヶ月です。バビロンに捕え移されました。そして最後にゼデキヤが王となります。彼もバビロンに背き、ついにエルサレムが破壊されます。このエホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤの四人の王がこれから読む箇所が登場します。そして最後に、ユダから出るまことの王、正しい若枝なるイエス・キリストが出てきます。

そして23章後半から、預言者に対する預言が始まります。これまでも偽預言者に対する言葉が

多くありましたが、なぜ偽預言を行なうのか？皆さんも疑問に思われた方が多かろうと思います。いわば偽預言の内科診断のようなものを、神は行なわれます。

1A 敵対される主 21

1B 悔い改めなしの救い 1-10

21:1 主からエレミヤにあったみことば。ゼデキヤ王は、マルキヤの子パシュフルと、マアセヤの子、祭司ゼパニヤをエレミヤのもとに遣わしてこう言わせた。21:2 「どうか、私たちのために主に尋ねてください。バビロンの王ネブカデザルが私たちを攻めています。主がかつて、あらゆる奇しいみわざを行なわれたように、私たちにも行ない、彼を私たちから離れ去らせてくださるかもしれませんから。」

話は、最後の王ゼデキヤ王の時に、彼の治世の終わりから始まります。紀元前588年の出来事です。バビロンがエルサレムを包囲しました。エルサレムがバビロンに抵抗していますが、この二年後、586年にバビロンが進入しエルサレムを滅ぼします。(2列王 25:1-4)。ゼデキヤは、おそらくヒゼキヤ王の時のことをここで言及しているのだと思います。「主がかつて行なわれた奇しい御業」というのは、エルサレムを包囲していたアッシリヤの軍隊を主が、一夜にして滅ぼしてくださったことでしょう。主はバビロンに対しても、同じようにしてくださるかもしれないと期待しています。

21:3 エレミヤは彼らに言った。「あなたがたは、ゼデキヤにこう言いなさい。21:4 イスラエルの神、主は、こう仰せられる。『見よ。あなたがたは、城壁の外からあなたがたを囲んでいるバビロンの王とカルデヤ人とに向かって戦っているが、わたしは、あなたがたの手にしている武具を取り返して、それをこの町の中に集め、21:5 わたし自身が、伸ばした手と強い腕と、怒りと、憤りと、激怒とをもって、あなたがたと戦い、21:6 この町に住むものは、人間も獣も打ち、彼らはひどい疫病で死ぬ。21:7 そのあとで、..主の御告げ。..わたしはユダの王ゼデキヤと、その家来と、その民と、この町で、疫病や剣やききんからのがれて生き残った者たちとを、バビロンの王ネブカデザルの手、敵の手、いのちをねらう者たちの手に渡す。彼は彼らを剣の刃で打ち、彼らを惜しまず、容赦せず、あわれまない。』」

主は、バビロンに対して戦ってくださるのではなく、むしろバビロンと共にエルサレムに対して戦われます。彼らの武器はエルサレムの真中に集められる、つまりバビロンがエルサレムの城壁を破って、その中に入ってくるということです。それだけでなく、バビロンの手に抛らず、疫病によっても直接、主の手が下ります。そして、主がイスラエルを救うためにエジプトを打たれた時に出てきた「伸ばした手と強い腕」という表現が、ここで出てきています。主がイスラエルをかばってくださり、その敵に戦ってくださったその力強い御業は、今、かえってイスラエルに対して行なわれているということです。

ゼデキヤは、神についての知識はありました。神は昔から、イスラエルの味方になってくださる

という知識です。確かに神の契約はそのようなものでした。神は真実な方です。しかし、彼らは主の名を呼び求めながら、実際は主を捨てていました。私たちは、口でイエスをまだ信じていません、受け入れていませんと言っておられる方々については、見分けは容易です。まだ神と敵対関係にあることを知ります。けれども、主の名を唱えているけれども、その行いが神を信じていないことが明らかな場合、その口で言っていることに騙されてはいけません。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そして、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。(1コリント 6:9-10)」

21:8 「あなたは、この民に言え。主はこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたがたの前に、いのちの道と死の道を置く。21:9 この町にとどまる者は、剣とききんと疫病によって死ぬが、出て、あなたがたを囲んでいるカルデヤ人にくだる者は、生きて、そのいのちは彼の分捕り物となる。21:10 なぜならわたしは、幸いのためにではなく、わざわいのためにこの町から顔をそむけるからである。…主の御告げ。…この町は、バビロンの王の手に渡され、彼はこれを火で焼くであろう。』」

このような神の裁きの中においても、神は彼らに「いのちの道」を置いてくださっています。御怒りの中にも憐れみを置いてくださっています。「いのちの道と死の道」というのは、申命記 30 章 15 節に出てきます。イスラエルに対するモーセの厳粛な言葉です。二つの道があり、祝福か呪いかのどちらかで、これはあなたがたが選ぶものだ、ということです。そして、命の道は、バビロンに投降することです。これはもちろん、ユダヤ人にとってとてつもない屈辱です。耐え難いことです。けれども、この神の懲らしめの中に服することが命の道であり、癒しの道であります。

2B 誤った保障 11-14

21:11 ユダの王家のために。…「主のことばを聞け。21:12 ダビデの家よ。主はこう仰せられる。朝ごとに、正しいさばきを行ない、かすめられている者を、しいたげる者の手から救い出せ。さもないと、あなたがたの悪行のために、わたしの憤りが火のように燃えて焼き尽くし、消す者はいない。」

ゼデキヤに対する預言を与えた後、話は戻って、ヨシヤ王の後に出てきた四人の王たち全体に、この言葉を与えておられます。「朝ごとに正しい裁きを行なう」とありますが、人々が何かの事件に巻き込まれて、それを訴え出る時には裁判所ではなく、王に直訴していました。ダビデの息子アブシャロムが民の心を王から自分になびかせるために、彼は「朝早く、門に通じる道のそばに立っていた。(2サムエル 15:2)」とあります。裁きのために王のところに来て訴えようとしていたからです。

そして、その裁きは、虐げられている者を救うというものでした。王の力と権威が与られていたからこそ、その働きをすることができます。聖書全体に、神が貧しい者の叫びを聞かれる姿勢を読むことができます。例えば、詩篇 12 篇 5 節、「主は仰せられる。『悩む人が踏みにじられ、貧しい人

が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。』とあります。モーセの律法の中には、女性、奴隷、貧しい者、やもめ、在留異国人についての、彼らを弁護し、彼らを救済する数多くの定めがあります。ですから、神の代理人として立てられている王が、これら弱者を虐げる者から救い出す役目を担わされていたのです。

21:13 「ああ、この谷に住む者、平地の岩よ。あなたに言う。…主の御告げ。…あなたがたは、『だれが、私たちのところに下って来よう。だれが、私たちの住まいにはいれよう。』と言っている。21:14 わたしはあなたがたを、その行ないの実にしたがって罰する。…主の御告げ。…また、わたしは、その林に火をつける。火はその周辺をことごとく焼き尽くす。」

ここの「谷」は、エルサレムを囲む谷を指しています。町の東はケデロンの谷が、南と西にはヒノムの谷があります。つまりここは、北側だけを防御すれば、エルサレムは十分守られるという安心感を表しています。そして「平地の岩」というのは、谷に囲まれたエルサレムの町の中のことです。「林に火をつける」とありますが、これは王の宮殿のことです。覚えていますか、ソロモンが建てた宮殿は「レバノンの森(1列王 7:2)」と呼ばれました。レバノンの杉の木を使って宮殿を建てたからです。火を付けると言われますが、具体的には、バビロンが火をつけてこれを燃やします。

神が王を立てられて、そこに権力と富を与えられている理由は、それを知恵をもって民を苦しみや圧迫から救い、また国を富ませ繁栄させるためです。神の恵みによって、その務めを担っています。ですから王自身が、主のしもべであり、それに忠実であることが要求されます。権威ある者は、自分自身が権威の下になければいけません。それを忘れる時に腐敗が起こります。そして、自分は裁きから免れられるという誤った安心感を抱いています。神はこのことに対して、公正に裁かれます。

2A 断たれるダビデの王座 22-23:8

1B 正しい裁き 1-9

22:1 主はこう仰せられる。「ユダの王の家に下り、そこで、このことばを語って 22:2 言え。『ダビデの王座に着いているユダの王よ。あなたも、この門のうちにはいつて来るあなたの家来、あなたの民も、主のことばを聞け。22:3 主はこう仰せられる。公義と正義を行ない、かすめられている者を、しいたげる者の手から救い出せ。在留異国人、みなしご、やもめを苦しめたり、いじめたりしてはならない。また罪のない者の血をこの所に流してはならない。22:4 もし、あなたがたがこのことばを忠実に行なうなら、ダビデの王座に着いている王たちは、車や馬に乗り、彼らも、その家来、その民も、この家の門のうちにはいることができよう。22:5 しかし、もしこのことばを聞かなければ、わたしは自分にかけて誓うが、…主の御告げ。…この家は必ず廃墟となる。』」

同じように王に対して、エレミヤが語るように命じられています。ここで、「この門のうちにはいつて来る」とありますが、門において行政的な手続きが行われます。王が裁きを行なう座も、そのよ

うなところに敷設されている場合もあります。そこに、ここに書かれている、「在留異国人、みなしご、やもめを苦しめたり、いじめたりしてはならない。また罪のない者」という人々がやって来ます。彼らをないがしろにしてはならない、ということです。そしてここで、大事な言葉が出てきます。「公義と正義」です。公義とは、公正に治めるという意味合いがあります。そして正義は、もっと人との関係が強い言葉で、それをまっすぐにするを意味します。ですから、虐げられている者、貧しい者がいる時に、彼らを救済するというのは正義の行ないになります。正義と共に、救い、という言葉がイザヤ書ではしばしば出てきました。イエス様は、その全能の力によって、弱い者を強め、貧しい者を霊的富で富ませ、囚われている人を解放されました。これが正義の業です。

ここで重要な言葉は、「忠実に行なうなら」であります。主から命じられていることを、しっかりと行なっていく、勤勉に行なっていくことが大事です。教会の中においても、これが指導する時の賜物であることをパウロは教えています。「指導する人は熱心に指導し(ローマ 12:8)」「1ペテロ 5:2-3 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求め心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」

22:6 まことに、ユダの王の家について、主はこう仰せられる。「あなたは、わたしにとってはギルアデ、レバノンの頂。しかし必ず、わたしはあなたを荒野にし、住む者もない町々にする。22:7 わたしはあなたを攻めるため、おのおの武具を持つ破壊者たちを準備する。彼らは、最も美しいあなたの杉の木を切り倒し、これを火に投げ入れる。22:8 多くの国々の民がこの町のそばを過ぎ、彼らが互いに、『なぜ、主はこの大きな町をこのようにしたのだろう。』と言うと、22:9 人々は、『彼らが彼らの神、主の契約を捨て、ほかの神々を拝み、これに仕えたからだ。』と言おう。」

先に話したように、王の宮殿は杉の木に囲まれていました。「ギルアデ」はヨルダン川東岸、南北に広がる地域ですが、そこも森で有名なところですが、そして、異邦人でさえもが、エルサレムの廃墟を見て、神を考えざるを得なくなります。彼らが裁かれた姿を見て、むしろその神をあがめる証しを神ご自身が残しておられるということです。

2B ヨシヤ以後の王 10-30

1C 二度と帰らぬ王 10-12

22:10 死んだ者のために泣くな。彼のために嘆くな。去って行く者のために、大いに泣け。彼は二度と、帰って、故郷を見ることがないからだ。22:11 父ヨシヤに代わって王となり、この所から出て行った、ヨシヤの子、ユダの王シャルムについて、主はまことにこう仰せられる。「彼は二度とここには帰らない。22:12 彼は引いて行かれた所で死に、二度とこの国を見ることはない。」

これは、ヨシヤの子エホアハズに対する預言です。「シャルム」とはエホアハズのことです。2列王記 23 章 31-34 節にこのことが書かれています。ヨシヤは、バビロンと戦っているアッシリヤを助け

るために北上しているエジプトのパロ、ネコと戦いました。そしてメギドで戦死しました。その後、ユダの民は彼の子、エホアハズを王に立てたのです。けれども、この動きをネコは気に入らず、自分に従属する王を別に立てたのです。それがエホヤキムです。そしてネコはエホアハズをエジプトに連れて行き、エホアハズはエジプトで死にました。たった三ヶ月の話です。ヨシヤの死を悼んでいたのですが、そんなことより、自分自身の境遇を悼み、悲しめと命じておられます。

2C 不義による自分の家 13-19

22:13 「ああ。不義によって自分の家を建て、不正によって自分の高殿を建てる者。隣人をただで働かせて報酬も払わず、22:14 『私は自分のために、広い家、ゆったりした高殿を建て、それに窓を取りつけ、杉の板でおおい、朱を塗ろう。』と言う者。22:15 あなたは杉の木で競って、王になるのか。あなたの父は飲み食いしたが、公義と正義を行なったではないか。そのとき、彼は幸福だった。22:16 彼はしいたげられた人、貧しい人の訴えをさばき、そのとき、彼は幸福だった。それが、わたしを知ることでなかったのか。・・主の御告げ。・・22:17 しかし、あなたの目と心とは、自分の利得だけに向けられ、罪のない者の血を流し、しいたげと暴虐を行なうだけだ。

エホヤキムに対する預言です。エジプトはエホアハズを捕え移した後に、金や銀をエホヤキムに要求しました。それだけでも重税であるのに、何と無給で自分の宮殿の建築のために働かせていたのです。そこで大事なのは、父ヨシヤとの比較です。彼はたしかに富がありました。「**飲み食いしたが**」とあり、豊かに暮らしていました。けれども、彼は自分の住まいによって幸福だったのではなく、公義と正義を行なったからです。富を持っていたこと自体が間違いではないのです。主が下さる恵みは、王に豊かに注がれています。しかし、その恵みを受け続けるためにはへりくだりが必要であり、任されている務めをしっかりと果たしていくからこそ、その富は清められています。そしてヨシヤがその中にいたので、神を親密に知ることができました。私たちが神の言われたことを行なわなければ分からないことはたくさんあります。

17 節に、エホヤキムが罪のない者の血を流し、虐げと暴虐を行なうだけとありますが、これは必ずしも彼自身がそれを行なっているということではありません。かえって、何もしてあげなかったのです。そのような仕打ちを受けていたといったほうが正確でしょう。自分が正しいことを行なわないことによって、悪がはびこることを許すことは、その悪を行なっているのと同じことです。「ヤコブ 4:17 なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」

22:18 それゆえ、ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムについて、主はこう仰せられる。だれも、『ああ、悲しいかな、私の兄弟。ああ、悲しいかな、私の姉妹。』と言って彼をいたまず、だれも、『ああ、悲しいかな、主よ。ああ、悲しいかな、陛下よ。』と言って彼をいたまない。22:19 彼はここからエルサレムの門まで、引きずられ、投げやられて、ろばが埋められるように埋められる。

彼は民からも、実に自分の家の者からも非常に嫌われます。死んでも、悼むものがいません。

エホヤキムは、その治世の第三年ネブカデネザルが王となったときにバビロンに捕え移されます(2歴代 36:5-7)。他の王族の者たちも捕え移されますが、その中にダニエルや三人の友人がいました(ダニエル 1:1)。けれども、理由は分かりませんが彼はエルサレムに戻されました。そして今度は、エジプトではなくバビロンに従属することになります。そして三年後、バビロンが勢力をさらに広げるべくエジプトに向かいましたが、その時は、エジプトはバビロンを追い返しました。これを見て、彼はエジプトの側につくことにし、バビロンに反逆したのです。そこでネブカデネザルは略奪隊を、自分の国から、またアラムやモアブ、アモン人を使って送ります(以上2列王 24:1-2)。

それで彼はエルサレムから追い出されるのです。おそらくエルサレムの住民は、バビロンを恐れて、降伏のしるしとしてエルヤキムをエルサレムからつまみ出したのでしょう。誰かが彼を殺したのかもしれませんが。そこで、このエレミヤの預言にあるように、ろばが埋められるように埋められるという言葉が実現したのでしょう。

3C 投げ捨てられる子孫 20-30

20 節から 23 節は、エホヤキンがバビロンに捕え移される第二次捕囚を予告するものです。王に対してではなく、エルサレムに対して語られています。

22:20 レバノンに上って叫び、バシヤンで声をあげ、アバリムから叫べ。あなたの恋人はみな、碎かれたからである。22:21 あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない。』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。22:22 あなたの牧者はみな風が追い立て、あなたの恋人はとりこになって行く。そのとき、あなたは自分のすべての悪のゆえに、恥を見、はずかしめを受ける。22:23 レバノンの中に住み、杉の木の中に巣ごもりする女よ。陣痛があなたに起こるとき、産婦のような苦痛が襲うとき、あなたはどんなにうめくことだろう。」

「バシヤン」は今のゴラン高原です。ガリラヤ湖の北東にある高原地帯です。そして「アバリム」はヨルダン川の東にある山々です、ネボ山などエリコの向こう側にあります。そしてレバノンです。これら周囲の民とユダは同盟を結んでいました。バビロンに対抗するためでしたが、それで主はこの地域の人々を「あなたの恋人」と呼ばれています。エジプトに代わって、バビロンがこの地域全体に入り、国々を倒していきました。列王記第二 24 章 7 節に、「エジプトの王は自分の国から再び出て来ることがなかった。バビロンの王が、エジプト川からユーフラテス川に至るまで、エジプトの王に属していた全領土を占領していたからである。」とあります。

そして、その時のエルサレムの姿、またエホヤキン自身の姿でもありましょう、主が語りかけても「私は聞かない」というものでした。それが若い頃からの姿勢だったと言います。残念であります、若い頃から聞いて、主に召された時には神の言葉を語る預言者、また主を求める王たちがいたのに、そうではない者たちもこのようにいたということです。そして牧者とはエルサレムの王のことで、

彼は捕え移されていきます。

22:24 「わたしは生きている、…主の御告げ。…たとい、エホヤキムの子、ユダの王エコヌヤが、わたしの右手の指輪の印であっても、わたしは必ず、あなたをそこから抜き取り、22:25 あなたのいのちをねらう者たちの手、あなたが恐れている者たちの手、バビロンの王ネブカデレザルの手、カルデア人の手に渡し、22:26 あなたと、あなたの産みの母を、あなたがたの生まれた所ではないほかの国に投げ出し、そこであなたがたは死ぬことになる。22:27 彼らが帰りたいと心から望むこの国に、彼らは決して帰らない。」

「エコヌヤ」はエホヤキンのことです。「右手の指輪の印」とは、王の権威によって何かを認証する時に使う印のことです。いわゆる判子ですね。ですから王にとって自分の体の一部のようなものです。主はエコヌヤを「わたしの右手の指輪の印であっても」と言われています。エコヌヤはダビデの家の者です。ダビデの家に世継ぎの子が与えられると主がダビデに約束されたその継承者です。そうであっても、主はなお、彼を抜き取られたのです。主ご自身が、契約の堅さ、それが変更されることのない、確かな約束であることを知っておられました。けれども、彼らが主を完全に捨ててしまっている今、その約束を少なくともエコヌヤの系列では破棄せざるをえないということです。

22:28 このエコヌヤという人は、さげすまれて碎かれる像なのか。それとも、だれにも喜ばれない器なのか。なぜ、彼と、その子孫は投げ捨てられて、見も知らぬ国に投げやられるのか。22:29 地よ、地よ、地よ。主のことばを聞け。22:30 主はこう仰せられる。「この人を『子を残さず、一生栄えない男。』と記録せよ。彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座に着いて、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。」

これは非常に驚くべき言葉です。ここにおいて、ユダの国におけるダビデの王朝が途切れてしまいました。しかし次の章を見れば分かりますが、エコヌヤではないまた別の系統のダビデの子孫が立てられて、ご自分の義を確立されます。

マタイによる福音書1章にあるイエス・キリストの系図に、「バビロン移住の後、エコニヤにサラテルが生まれ(12 節)」という記述があります。エコニヤの名前が系図の中にあるのです。けれどもマタイは注意深く 16 節に、「ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた」と記しています。「イエスの父」ではなく「マリヤの夫」なのです。なぜならマリヤは処女の時にイエス様を身ごもったのであり、ヨセフとイエス様には血のつながりがないからです。ですからマタイによる福音書の系図は、公式のダビデ王朝の継承者としての主の姿を描いてはいるのですが、ダビデの子孫としての系図は他にありません。

ルカによる福音書3章 23 節から、また別の系図があります。「このヨセフは、ヘリの子…」とありますが、ヘリはヨセフの義理の父であり、実際はマリヤの父です。そして順次さかのぼると、ダビ

デの息子「**ナタン**」の名が出てきます。その後は、マタイの系図と同じです。つまりマタイの系図は、ソロモンからの王の継承が記録されているのに対して、ルカはダビデの別の息子ナタンからの子孫の系図が記録されているのです。このことによって、イエス様がダビデの家を受け継ぐ子、神の国を治めるメシヤであるという証拠は成り立つのです。

3B 正しい若枝 1-8

こうして、初めにゼデキヤ、それからエホアハズ、エホヤキム、エホヤキンに至るまでの流れで、ついにダビデへの神の約束が反故にされてしまったかのようになってしまった姿を見ました。しかし、これもまた人の行ないによっては義とされない、それでは神の相続を受け継げないという霊的真理を表しています。次からは、ゆえに神が専らご自分の憐れみによって、キリストによるダビデ契約の約束を守られる姿を見ていきます。

23:1 「ああ。わたしの牧場の群れを滅ぼし散らす牧者たち。…主の御告げ。…」23:2 それゆえ、イスラエルの神、主は、この民を牧する牧者たちについて、こう仰せられる。「あなたがたは、わたしの群れを散らし、これを追い散らして顧みなかった。見よ。わたしは、あなたがたの悪い行ないを罰する。…主の御告げ。…」23:3 しかし、わたしは、わたしの群れの残りの者を、わたしが追い散らしたすべての国から集め、もとの牧場に帰らせる。彼らは多くの子を生んでふえよう。23:4 わたしは彼らの上に牧者たちを立て、彼らを牧させる。彼らは二度と恐れることなく、おののくことなく、失われることもない。…主の御告げ。…」

「牧者」は指導者のこと、王たちのことです。弱った者のために裁きを行なわなければいけない、つまり羊を守り、羊をかばわなければいけないはずの牧者が、かえってそれを散らしてしまったことを咎めておられます。具体的に、民の大多数が死に、残された者はバビロンに捕え移されました。しかし、「わたしは」という主語が 3 節から始まります。人にできなくなっていることを、神が行われます。「牧者たち」と複数になっています。バビロンからの帰還後、ユダには何人かの指導者がいました。ゼルバベルとヨシュア、そしてエズラ、さらにネヘミヤがいます。しかし、究極的には彼らによって回復されません。終わりの日に、主が全ての国から捕われ人を帰らせて、複数の指導者を立てられます。それらの指導者の頭が、私たちの主イエス・キリストです。

23:5 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。23:6 その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。

「ダビデの若枝」というメシヤを呼ぶ名称があります。イザヤが、「11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」ゼカリヤ書にもこの呼び名がでています。そして、この方が正しい方であるというのが、エレミヤ書で強調されていることです。それもそのはず、不義がまかり通っていて、正義がなくなってしまったところにエレミヤは置かれていたのです。その時に、

主は「主は私たちの正義。」と呼ばれる方を立てることを約束されます。午前礼拝でも話しましたが、主は私たちの必要そのものになってくださいます。戦いが必要な時は旗となつてくださり、物が足りない時は備えとなつてくださり、つまり主がおられれば、その時点で必要がみたされるのです。

23:7 それゆえ、見よ、このような日が来る。…主の御告げ。…その日には、彼らは、『イスラエルの子らをエジプトの国から上らせた主は生きておられる。』とはもう言わないで、23:8 『イスラエルの家のすえを北の国や、彼らの散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる。』と言って、自分たちの土地に住むようになる。」

バビロンからの帰還は、第二の出エジプトに位置付けられます。イスラエルの民にとって、エジプトを出ることは自分たちが生まれることを意味しましたが、バビロンから戻ることは新たに生まれることを意味しました。新しい贖いの中に彼らは入れられます。そして、私たちも同じです。肉体として一度生まれ、けれども罪の中に生きていた私たちが、御霊によって新たに生まれます。

3A 偽預言者 23

そして 9 節から、偽預言者に対する預言を行ないます。王という政治的な指導者がいて、そして預言者という霊的な指導者がいました。その霊的指導者が行う偽りの預言は、人々を迷わせ、彼らを滅ぼすのに大きく影響を与えます。何をもって、彼らが偽預言を行なっていくのかを見ていきます。

1B 汚れた行ない 9-15

23:9 預言者たちに対して。…私の心は、うちに砕かれ、私の骨はみな震える。私は酔いどれのようだ。ぶどう酒に負けた男のようになった。主と、主の聖なることばのために。23:10 国は姦通する者で満ちているからだ。地はのろわれて喪に服し、荒野の牧草地は乾ききる。彼らの走る道は悪で、正しくないものをその力とする。

聖なる言葉を持っているエレミヤは、国が汚れていることによって体も震わせるほどの衝撃を受けていました。

23:11 実に、預言者も祭司も汚れている。わたしの家の中にも、わたしは彼らの悪を見いだした。…主の御告げ。…23:12 それゆえ、彼らの道は、暗やみの中のすべりやすい所ようになり、彼らは追い散らされて、そこに倒れる。わたしが彼らにわざわいをもたらし、刑罰の年をもたらすからだ。…主の御告げ。…23:13 サマリヤの預言者たちの中に、みだらな事をわたしは見た。彼らはバアルによって預言し、わたしの民イスラエルを惑わした。23:14 エルサレムの預言者たちの中にも、恐ろしい事をわたしは見た。彼らは姦通し、うそをついて歩き、悪を行なう者どもの手を強くして、その悪からだれをも戻させない。彼らはみな、わたしには、ソドムのもようであり、その住民はゴモラのもようである。23:15 それゆえ、万軍の主は、預言者たちについて、こう仰せられる。「見よ。

わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がったからだ。」

彼らが偽預言を行なう大きな理由は、「自分たちの行ないが悪い」ということであります。国が悪い行ないで汚れているのですが、自分たちもその中から聖別されているのではなく、その一部になってしまっているということです。教会に、また霊的指導者に世の汚れが入ってくるということ、これは致命的です。そして行ないが悪いので、主の聖なる言葉をそのまま語ることができなくなります。語るものなら、自分が裁かれなければいけないことを知っているのに、聖なる言葉ではない異なることを語るようになるのです。イスラエルではバアルの預言者がいましたが、エルサレムでも名こそヤハウエでしたが、していることは姦通や嘘、悪者と手を組むなど、ソドムとゴモラと変わらないようなことをしていました。それゆえ、彼らは毒水を飲まされます。

イエス様が、偽預言者についてこのように語りました。「マタイ 7:15-20 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」そしてペテロ第二の手紙 2 章には、偽教師に対する警鐘が書かれていますが、やはり世の汚れ、肉の汚れを持ちながら、教会の中で動いている姿を見ます。

2B 心の幻 16-24

23:16 万軍の主はこう仰せられる。「あなたがたに預言する預言者たちのことばを聞くな。彼らはあなたがたをむなしものにしようとしている。主の口からではなく、自分の心の幻を語っている。23:17 彼らは、わたしを侮る者に向かって、『主はあなたがたに平安があると告げられた。』としきりに言っており、また、かたくなな心のままに歩むすべての者に向かって、『あなたがたにはわざわざ来ない。』と言っている。」23:18 いったいだれが、主の会議に連なり、主のことばを見聞きしたか。だれが、耳を傾けて主のことばを聞いたか。23:19 見よ。主の暴風、…憤り。…うずを巻く暴風が起こり、悪者の頭上にうずを巻く。23:20 主の怒りは、御心の思うところを行なって、成し遂げるまで去ることはない。終わりの日に、あなたがたはそれを明らかに悟ろう。23:21 わたしはこのような預言者たちを遣わさなかったのに、彼らは走り続け、わたしは彼らに語らなかったのに、彼らは預言している。23:22 もし彼らがわたしの会議に連なったのなら、彼らはわたしの民にわたしのことばを聞かせ、民をその悪の道から、その悪い行ないから立ち返らせたであろうに。

偽預言者の二つ目の問題は、「心の中の幻」です。自分の思っていること、願っていること、好ましいと思っているものを語っていきます。ですから、もちろん誰だって平安が与えられたいと思って

いますから、「主はあなたがたに平安があると告げられた。」と言いますし、心が頑ななままの人にも災いが来ないと言っています。良かれと思って、私たちもいろいろなことを言いますね、しかし、それが神の言葉に反したことであれば、それは偽預言になるということです。

そのようにならないための対抗策は、「主の会議」です。これがとても面白い表現です。主が議長であられて、そこに預言者が参加しているのです。そして、主が語られている中で、それを祈りによって尋ねていき、主が答えられ、そして話が次第にまとまって、主が何を語られているかを民に話していくということであります。これをまさに、神の御言葉を取り次ぐ者たちは行なっています。主が何を語っておられるのかを聞き、じっくり考え、祈り、反芻し、それで自分の思いや願いではなく、主が語られていることをそのまま取り次いでいくのです。

23:23 わたしは近くにいれば、神なのか。…主の御告げ。…遠くにいれば、神ではないのか。

23:24 人が隠れた所に身を隠したら、わたしは彼を見ることができないのか。…主の御告げ。…天にも地にも、わたしは満ちているではないか。…主の御告げ。…

これは、偽預言が人の表面的なところしか取り扱っていないことを示しています。隠れたところで行っていることは、神はそのそばにいないだろうから、そのことは取り扱わないでほしいと人々は願います。しかし、みことばは人の心の思い計ることすべてを見通すものです。つまり、魂の深みへと語るものであり、人を悔い改めに導き、聖霊によって変えていきます。「ヘブル 4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」

3B 夢と御言葉 25-32

23:25 「わたしの名によって偽りを預言する預言者たちが、『私は夢を見た。夢を見た。』と言ったのを、わたしは聞いた。23:26 いつまで偽りの預言が、あの預言者たちの心にあるのだろうか。いつまで欺きの預言が、彼らの心にあるのだろうか。23:27 彼らの先祖がバアルのためにわたしの名を忘れたように、彼らはおのおの自分たちの夢を述べ、わたしの民にわたしの名を忘れさせようと、たくらんでいるのだろうか。23:28 夢を見る預言者は夢を述べるがよい。しかし、わたしのことばを聞く者は、わたしのことばを忠実に語らなければならない。麦はわらと何のかかわりがあるか。…主の御告げ。…23:29 わたしのことばは火のようではないか。また、岩を砕く金槌のようではないか。…主の御告げ。…

三つ目の偽預言者の特徴は、「夢」です。これは、「感情や感傷的なこと」と言い換えたらよいでしょうか？ここに、「麦はわら」という言い回しもできます。麦は中身があるものですが、それが神の御言葉であります。それを忠実に語る時に、その栄養が栄養となっていくと。ところが、人々の感じていること、その流行のようなもの、まさに夢を語っていくことは、主の御名を忘れさせていくようなものであると言っています。それに対して、神の言葉は、人の心を打ち砕く金槌のようなも

のです。聖書の言葉は、堅い食物とあります。「ヘブル 5:13-14 まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。」

23:30 それゆえ、見よ、主の御告げ。わたしは、おのおのわたしのことばを盗む預言者たちの敵となる。23:31 見よ、主の御告げ。わたしは、自分たちの舌を使って御告げを告げる預言者たちの敵となる。23:32 見よ、わたしは偽りの夢を預言する者たちの敵となる。主の御告げ。彼らは、偽りと自慢話をわたしの民に述べて惑わしている。わたしは彼らを遣わさず、彼らに命じもしなかった。彼らはこの民にとって、何の役にも立ちはしない。主の御告げ。

偽預言者たちに対する裁きです。彼らが、「偽りと自慢話」と言っていますね。主の言葉ではなく、自分のことを話し、しかもその話には自慢が入っており、話は誇張されています。

4B 主による重荷 33-40

23:33 この民、あるいは預言者、あるいは祭司が、『主の宣告とは何か。』とあなたに尋ねたら、あなたは彼らに、『あなたがたが重荷だ。だから、わたしはあなたがたを捨てる。』と言え。主の御告げ。23:34 預言者でも、祭司でも、民でも、『主の宣告。』と言う者があれば、その者とその家とを、わたしは罰する。」

「宣告」と訳されている言葉ですが、英語では burden と訳されています。「重荷」です。ヘブル語の נִשְׂבָּר (マサ) は、もともと「荷物」であるとか「運ぶ」という意味を持っています。主からの言葉ではないのに、たやすく「主の宣告」という言い回しを使う姿を主は描いておられます。かえってそれが主にとって大きな負担となっていることを、同じ言葉を使って「あなたがたが重荷だ」と言われているのです。

23:35 あなたがたは互いに「主は何と答えられたか。主は何と語られたか。」と言うがよい。23:36 しかし「主の宣告。」ということをして二度と述べてはならない。主のことばが人の重荷となり、あなたがたが、生ける神、万軍の主、私たちの神のことばを曲げるからだ。23:37 「あの預言者たちにこう言え。主は何と答えられたか。主は何と語られたか。23:38 もし、あなたがたが『主の宣告。』と言うなら、それに対して、主はこう仰せられる。『わたしはあなたがたに、主の宣告、と言うなど言い送ったのに、あなたがたは主の宣告というこのことばを語っている。23:39 それゆえ、見よ、わたしはあなたがたを全く忘れ、あなたがたと、あなたがたや先祖たちに与えたこの町とを、わたしの前から捨て、23:40 永遠のそしり、忘れられることのない、永遠の侮辱をあなたがたに与える。』」

偽預言者の四つ目の特徴は、「これが主の語られていることです」と、語られてもいないのに語ることです。聖書をじっくりと読み、学び、そして主が語られていることを聞くのではなく、自分で勝手に話してしまうことです。「あの預言者たちにこう言え。主は何と答えられたか。主は何と語られ

たか。」と言っていますね、ここです。まず、自分が聞かなければ話せないのです。聴いていないのに、話しているから偽預言となります。預言者は、ずっと主に聞いていく者の姿です。それを我々キリスト者もしていくのではないのでしょうか。自分の考えではなく、主よ、あなたは何と語られているのですかという姿勢です。